

▽：村山鋼材（本社）東京都大田区、村山和雄社長は先頃、ジャンボカuttingライン1号機（以降JCL1）を東京工場から浦安工場へ移設。内容的によりパワーアップした形で営業運転をスタートさせたばかりだ。この移設により、製造拠点集約と製販一体化による業務効率向上と、設備大改造による製品品質向上が実現するが、今回はその品質力アップに焦点を当てたい。

▽：JCL1はライン移設とはいうものの、ファイナルレベラー、パイラーのリニューアルをはじめ内部の改造が徹底的に施されている。ライン全体

は淡いモスグリーンで塗り替えられており、新品同様となっている。ファイナルレベラーは同社製品の定評となっている板の内部応力制御の肝となる。同社では平成10年からレーザ用鋼板を開発・販売しているが、ハイテン化のニーズに対応し、現在では板厚9mmの



## 「村山ブランド」の進化

わが社のノウハウ

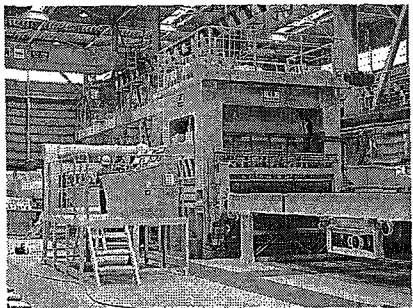
### 村山鋼材



の硬さが邪魔をする。それがカットシートの良さなのである。だが一方でコイル製品であるゆえの内部応力制御が難しくなる。この厄介な難題をクリアして誕生したのが、村山のレーザ用鋼板なのである。同社では板厚19mm対応も射程とし、広幅にも挑戦していく方針だ。板厚や板幅について現在のストライクゾーンでは最大で板厚16mmの5幅となっているが、ニーズの広がりを見極めながら、こうした新たなチャレンジを行っていく。

▽：ライン移設・稼働開始は4月21日から6月9日のわずか47日間で行われた。巧みなシミュレーションと現場の対応力と技術力がこれを支えた。普通ならば垂直立ち上げは困難なところだ。村山和雄社長は「一連の取り組みは単なる生き残りを目指してのことではない。村山としての成長戦略の一環」と強調する。お客様に満足して頂ける商品作りを徹底的に追求していく、この方針が全社で行き届いている。早期の立ち上げ、良質な製品への社員全体の熱意が成し遂げたことと言えよう。

▽：垂直立ち上げだったが、その陰には何度も何度もライン全体のバランスを確認し、また歩留まり効率の悪いサイズをわざわざテストするなど、営業開始以前から過酷な条件下での操業を繰り返してきた経緯がある。ここから始まる村山ブランドの更なる進化に業界の注目が集まる。（田）



## 経営報告書で「新日鉄住金」特集

住友金属工業は26日「経営報告書2012」を発行した。昨年に引き続き、同日開催の株主総会に出席した株主に配布された。

今年度版は以下のメッセージを軸に制作された。①新日本製鉄と統合、新日鉄住金株式会社として新たなスタートを切り「鉄づくりで社会に貢献する」という

変わらぬ決意を持って、さらなる高みを目指すこと②新日鉄住金は海外戦略をスピードディーに実行し、技術、コストを含め「総合力世界ナンバーワン」の鉄鋼メーカーを目指すこと。

なお、統合に関する特集ページは新日本製鉄と共同で作成。新本製鉄の経営報告書にも同じ内容が掲載されている。同報告書は同社ウェブサイトにPDF版（日本語版、英語版）を掲載している。